

Title	ルイス・ S・ フォイヤー著 『マルクスと知識人 : 脱イデオロギー論文集』
Sub Title	Lewis S. Feuer, Marx and the intellectuals : a set of post-ideological essays
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1970
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.43, No.8 (1970. 8) ,p.88- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19700815-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Lewis S. Feuer,

Marx and the Intellectuals:

A Set of Post-Ideological Essays

Garden City, New York, Doubleday & Company, Inc., 1969, viii+301 pp.

ルイス・S・フォイヤー著

『マルクスと知識人——

脱イデオロギー論文集』

ルイス・S・フォイヤーはユダヤ人移民労働者の息子として、一九一二年ニュー・ヨークに生れた。同市立大学卒業後、ハーヴァード大学に学ぶ。ヴァモント大学の哲学教授、パークレイのカリフォルニア大学の哲学および社会科学教授を務め、一九六三年春学期にはソヴェト哲学研究所の招きでモスクワを訪問した。六六年以来トロント大学の社会学教授として現在にいたつている。著書には『スピノザと自由主義の勃興』『科学的知識人たち』『世代の葛藤』、わが

国にも翻訳された『精神分析と倫理』などがある。彼の思想的立場は、この最後の書の訳者「あとがき」に解説されているが、要するに、マルクス主義に出発しプラグマティズムに接近したと言つてよい。それは彼のイデオロギー批判に端的に示されている。『精神分析と倫理』の最終章「イデオロギーをこえて」には、つぎのように書かれている。

「……われわれの分析の結論は、自由な思想と行為とは、イデオロギーからも自由だということである。イデオロギーとはなにか。それは推定のはたらきである。イデオロギーは、知識が手に入らないところに、願望実現を投射する。それは、抑圧したい現実を否定し、それが賞讃するものを究極的なものとして高揚する。イデオロギーは、政治的社会的な感情にもとづく世界観であり、意識的無意識的に、政治的な意志を宇宙の性質におしつけようとするころみである。……イデオロギーの時代には、ついに人間は知的自由をもとめて落ち着きがなくなる。人間はことばや公式を神格化したことに気がつく。好意の感情や、友情への抑圧された希求が、イデオロギーのいかめしさをぶちこわす。……イデオロギーの信奉者は、歴史はそのイデオロギーの侍女によつてつくられると信じる。……共産主義者は、世界弁証法の前提であるというイデオロギーに保証されている。あらゆる形態のイデオロギーには、共通した感情の満足がある。それは、もつとも不安定なときに、父親の祝福と、超自我の承認とを与える。……政治的価値としての残忍性は、極端な個人の抑圧の対応物であり、それはそれ自体の新しい意識をつくりあげる。

残忍性への強い動機は、歴史的超自我の命令として内面化される。

……イデオロギーは、人間が人間らしい反応を抑圧する道具であり、その行動を政治の命令にしたがつて形成する。」(同書 鶴見和子訳 岩波書店 一七三—一七六頁)

そして、「自由な文明は、イデオロギーの時代がおわるときに始まる」と確信しているフォイヤールは、いわゆるイデオロギーの終焉論者であることは明白である(ちなみに、この一章はチャイム・ワクスマン編『イデオロギーの終焉論争』(Chain I. Waxman ed. *The End of Ideology Debate*, New York, Funk & Wagnalls, 1968, pp. 64—68)に収録されている)。ここに紹介する書は、まさしく脱イデオロギー論文集であつて、著者の思想遍歴の *terminus* を印づけているのである。

しかもそれらは、一九三〇年代に生い育つたマルクス主義的知識人の原体験にもとづき、最近復活しつつある新しいラディカルリズム——思想史においての過去十年間は、「ネオ・マルクス主義の時代」と呼ぶに相応しい、と著者は述べている——に對して、きわめて批判的な立場から書かれている。「……一九六〇年頃からアメリカには、学生運動の発端と時を同じくして、マルクス主義への関心の復興が行われはじめた。その甦るネオ・マルクス主義を見つめると、私は、新しい運動の非合理性や道徳不在と考えられるものによつて不安にさせられた。旧い世代の過誤が明らかに、若い世代のあいだに対応部分を持ちつつあつた。累積的歴史的な経験法則といつたようなものがなかつたか。このようなムードのなかで、私は本書を構成する諸論文を度たび書いた」と述懐されているように。

すなわち、(一)「カール・マルクスの性格と思想—プロメテウスの心理復合と史的唯物論」、(二)「マルクス主義と知識階級のヘゲモニー」、(三)「疎外とはなにか——概念の変遷」、(四)「ソ連へのアメリカ旅行者たち(一九一七—一九三一年)——ニュー・デイル・イデオロギーの一構成要素の形成」、(五)「マルクスの悲劇俳優たち」、(六)「疎外されたアメリカ人と彼らのマルクス・エンゲルスにあたえた影響」、(七)「ネオ・プリミティヴィズム——疎外された知識人たちのネオ・マルクス主義」、(八)「ネオ・マルクス主義的社会科学概念」、(九)「ソヴェト・マルクス主義者たちの世代間の葛藤」、(十)「非決定性と経済発展」。以上の論文に流れている共通テーマ、「それはいわゆる知識人の疎外への探究であつて、社会科学の言語で書かれた神話をそなえたマルクス主義に、なぜ彼らは自分にもつとも趣味の合つた情緒的イデオロギー的表現を見いだすのか、ということである」。最後の論文を除いて、すべて六〇年代に雑誌に発表されたものであるが、ここではとくに、(一)(四)の論文をとりあげて、悲劇的に浮動する知識人の姿を考察してみたい。

マルクスはこう書いている、「プロメテウスは、哲学史上の聖徒や殉教者たちのうちでもつとも高貴なものである。また、アイスキュロスの『鎖につながれたプロメテウス』から劇的な科白を引いて、「まことにすべての神々をわたしは憎む」「わたしは自分の首伽を奴隸的屈従と取りかえたりは決してせぬ。ゼウスの奉仕に身を束縛されるよりか、岩に繋がれていた方がましだ」と、このようなプロメテウスの心理復合は、マルクスの思想的祝座の隅々にまで深く浸

透していた。『共産党宣言』を引き合いに出さずとも、彼の認識カテゴリーの究極にあるものは、つねに《闘争》であつた。だが、社会的現実というよりはむしろ神話的ドラマとして予見された、史的唯物論の弁証法の挫折を前に、狂わんばかりに焦慮する当のマルクスは、知識人というものの弱味と強さを如実にあらわしている。彼が革命運動のために労働者階級の運命に加わる知識人たちの象徴となつたことは、この「謎めいた男」の性格を理解すればよく分るだろう、とフォイヤーは言う。

このプロメテウスは、じつはもつとも無力な人間であつた。一九世紀知識人たちのなかで、彼ほど自分と家族を支えることができず職業も得られずに他人——とりわけマンチェスターの資本家——に依存し、忍苦の生活を堪えねばならなかつたものがあったらうか。《闘争》を世界観の中心に据えながら、彼は競争的なデモクラシー制度のなかにいてどうにもできなかつた、というのが真実である。だが、マルクスは本当に活動家であり、コミットした闘士であつたらうか。権威主義の権力を求めていたものの、乱闘騒ぎの政治を嫌つていた。国際労働者協会の会議にもただの一度出席しただけである。インターナショナルがニュー・ヨークに移るのを喜び、みずからは大英博物館での研究に戻つたのであつた。では、力萎えたマルクスのプロメテウスの心理複合の究極の源泉は一体なんであつたか。

マルクスは母親を憎んだ。たとえ父親に対するエディプスの反抗が彼にあつたとしても、それは母親への愛のためではなかつた。こ

の母性愛の拒絶からくる情緒的安定の欠落こそ、彼の闘争のさなかにあらわれた無力さである。「彼は愛憎の永遠なエンペドクレスの二元性をとり、母親との関係で歪められた愛を抑圧して、歴史における起動力として憎しみのみを残した。プロメテウスの人間となるのは、じつに拒まれた息子である」。マルクスの反セム主義は母親への憎悪に由来し、ユダヤ人の血に対する反逆が、とりも直さず反資本主義、ユダヤ人の陰謀説というものに傾かせた。マルクスが社会の発展過程の比喩として好んだのは、懐妊とか陣痛という言葉であつた。また、『経済学批判』序言にある「ブルジョワ社会の胎内……」という表現についても、精神分析の研究では、母親の胎内は静謐な安定性への憧憬、すなわち、子宮帰還願望を意味するのだが、マルクスの場合、それは強制、抑圧の対象となり、「彼は子宮に帰ることではなく、子宮から出ようと憧れている」のである。母親に向けられた反逆にかかづらい、男性らしさに自信をもてぬプロメテウスの心理複合は、自分を支えてくれる新しい母親を求める。労働者階級がまさに象徴的な母親となつた。マルクスは、「労働者階級の偉いなる胸に永久に抱かれる」ことだろう。

この種のパーソナリティ特性は、個人的な闘争にもまた受動的態度で、同胞的な性結合の要素を示唆している。これはドイツの革命的な学生活動の部分なし、少壮ヘーゲル学派の *Dokortisch* がよい例である。その指導者アドルフ・ルーテンベルクによつて、マルクスは『ライン新聞』の編集スタッフとなつたわけだ。彼は生涯、学生文化に固着していたようである。さらに、自己の受動性、他者

を搾取しているという罪に対する自己懲罰を正当化するため、極度の自己犠牲に駆り立てられる傾向、マゾヒズムの特徴——モーゼス・ヘスなどその典型だが——がマルクスに歴然と見られる。プロメテウスの精神はプロレタリアの美德、その道徳的なちからへと転向する。彼は無教育な労働者に愛情を感じても、同時代の一流の知識人からはあえて孤立していた。彼を賞讃する信奉者たちのヒエラルキーの頂点にいるときだけ安堵していたのだけれども、彼に唯一の仕事を与えてくれていた『ニュー・ヨーク・トリビュン』紙との関係もまことに奇妙である。

マルクスの如きプロメテウスの例外者にも、例外的でない家庭的悲劇があつた。ストリンドベルクのような翳が投げかけられていたのだ。経済的危機とか肉体的病疾など物語の一部分にすぎない。彼の妻はヒステリーと神経衰弱に見舞われた。それも原因は、おそらく彼女の女中ヘレーネ・デルムートとの情事であつた。ヘレーネとのあいだにはフレデリックという庶子まであつた。(エンゲルスの子と疑われたこともあつたが、死の数日前、彼は『資本論』の翻訳者サミュエル・ムーアの眼前で、マルクスの子であることを確証した。ムーアは実情をマルクスの娘エリナーに告げたという。)求婚者たちを断わり、マルクスの家族とともにとどまつた彼女は、彼の学究的仕事を助けた唯一のりの優しい女性らしい女であつた。他人に加える苦しみにはなんら罪意識を感じなかつたプロメテウス、神々に対する反抗こそ、数多くの煩瑣に苛まれ、救いがたき現実によつて裏切られた社会的姿勢なのであつた。年老いるにしたがつてマルクスは、「慢性的な精神

的憂鬱」に冒されて行つた。けだし、「神話によつて生きた生活は、神話が脱神話化されるとき、その内面的意味を打ち碎かれてしまふ。これがマルクスの思想的悲劇であつた」。

マルクスのプロメテウスの心理複合は、程度の差こそあれ、近代的知識人のドラマティックなモデルである。マルクス主義が知的エリートのアデオロギーとなるのは、資本主義社会から疎外された無力さであり、彼らの潜在的目的の狙いは、權威主義的な権力と支配、新しい独裁である。フオイヤーが指摘するように、この心理的類質同像はニュー・レフトにもあらわれている。彼らは破滅的な途をたどつているかのようだ、プロメテウスの壮重さからバルザックの『知られざる傑作』における老画家の空しさへと、「なんにもない、なんにもない。しかも十年もかかつたのに……」と絶叫しながら、疎外された知識人たちのネオ・マルクス主義とはどんな特徴をもつているのか。

革命的学生知識人という現象は、マルクスの生涯のなかで新しいものであつたし、彼自身も困惑し、それを充分理解していたわけではない。ロシア学生運動に対する評価も「愚劣なナンセンス」であり、経済的、道徳的、思想的に崩壊し行くロシアのより深い運動の副現象とみなしていた。ましてや、マルクス主義を反知性的、反西歐的、反労働者階級的なアデオロギーに改造するというようなことは到底考えられなかつた。マルクスはバクーニンとの非妥協的な闘いに挑んだ。しかし現時点からみると、バクーニンはマルクスに復讐しているかに思われる。すなわち、今日の知識人、学生活動家た

ちは、形式においてはマルクス主義的であるが、内容において、バクレーニン主義的であるからだ。多彩な、異なつた運動や下部運動がくりひろげられているけれども、それらの様相にはおよそつぎの諸特徴が指摘されるだろう。

(1) ネオ・マルクス主義的知識人は、労働運動が現代史の進歩的ちからだという概念を拒否する。C・W・ミルズの如くに、かかる《労働形而上学》をまつたく非現実的な「ヴィクトリア時代のマルクス主義からの遺産」とみなしている。

(2) 疎外された知識人こそ新しい社会を形成する主役である。この点で、彼らはバリで落伍者たちの秘密クラブを組織化した、あの不屈なルイ・ブランキの見解に立ち戻っている。

(3) ネオ・マルクス主義者は、経済過程と累積的な社会運動のインパーソナルな決定論を否認し、《体制》への起爆装置として個人のゲリラ活動というパーソナルな任意主義を信じる。体制の内在的發展ではなく、体制と個人との対決。

(4) 先進的工業社会のプロレタリアートよりも、後進諸国における農民層を遙かに革命的な潜在力をもつた生贄と考える。

(5) アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの有色人種を、北アメリカやヨーロッパの《ブルジョア的》白色人種からの解放戦争に参加する(より高次な意味で) 《プロレタリアート》とみなす傾向がある。

(6) ネオ・マルクス主義者は反都市的である。つまり、現代においては搾取する都市と、そのデカダンの物質文明に対して、ポピュ

リスト的教義を復活させようとする。

(7) 疎外された知識人であるがゆえに、彼らは反知性主義を振りかざす。大衆の文化水準を高めようというのではなく、最下層の水準にみずからをひきさげる。言葉、足どり、服装、道徳、礼儀作法、そのほかなんであれ、最下層の人びとの行動様式と自己同一化し、ブルジョワ文化の虚飾を棄て去ろうと試みる。彼らはいわゆるネオ・プリミティヴィストなのである。

(8) 三十歳あるいは二十五歳以下の若い世代は、革命的本能をエニークに具備している。ネオ・マルクス主義者は世代間の闘争を階級闘争と、とくにエリート主義とプリミティヴな本能主義と結合する。それは、二十五歳以上の人間はみな処刑すべし、と言つたP・N・トカチエフの見解へと逆転している。

(9) ネオ・マルクス主義者は、資本主義の没落を拱手傍観してはいない。彼らのもつとも恐れるものは、資本主義経済の安定と豊かさ、物質的財貨を与えて大衆を非革命化するその能力にはかならない。それゆえに、体制を分裂化させる不断の反乱とテロリズムを擁護する。

ネオ・プリミティヴィズムは、部族集団とマルクス主義とを融合させるのではなく、まさに西欧文明の諸価値に対する、西欧の人びと自身による意識的なプロテストなのだ。かつてマルクスとフロイトとがそれぞれ《意識》と《無意識》とを補充しようとしたのとは逆に、意識を無意識によつて、理性をイドによつて代置しようとして欲している。ネオ・マルクス主義者はマルクス主義の古い世代の

ヘゲモニーを打倒し、新しいスタイル、新しい戦術を要求する。チエ・ゲバラとかカストロの暴力を礼讃し、あるいは毛沢東の長征や延安の根拠地といったものを引継ごうとする。この高度なプリミティブイヴィスト、《非文明的》《劣等な》ものが、真に新しい社会の哲人王であるのか。疎外された知識人には、アナキズム的バクーニン妖怪が徘徊している。「バクーニン＝マルクス主義は知識階級の歴史における悲劇的な一章、彼らの背信の最悪なものであろう。なぜなら、それこそつとも自己破壊的であるからだ」。フォイヤールは、マルクス主義は知識人の阿片だと述べたレイモン・アロンに言い添える、「ネオ・バクーニンのマルクス主義は疎外された知識人の幻覚剤である」と。

エリナー・マルクスに関する論文は、フォイヤールによれば、一種の哲学的伝記であり、イデオロギーが個人生活にどのようなかわりを持つかを検証するひとつの例である。父と娘はロマンティックな小説を読み耽つたひと時もあつた。幼い頃、彼女はローマ・カトリック教会の美しい音楽に感動し、宗教的な憧れを抱いていた。しかし、彼女はプロメテウスの家庭にあつて、たえず落ち着いてはいなかつた。なにか暗い影が父への愛情のなかに射していたのである。成長するにつれ、父の教義の絶対性を確信し、社会主義運動に身を投じ、また女優にならうとも思っていた。やがて奔放な恋愛を体験し、恋仇と争つてエドワード・エーヴリングと結婚。しかし、この社会主義的騎士は風変りな男であつた。彼との生活は不幸であつた。彼女は憔悴しきり、彼女の世界は潰えてしまつた。一緒に心中

することを説得したのは彼である。青酸カリとクロロホルムの処方を書いたのも彼である、エリナーの筆蹟を巧みに真似て。彼は、死刑執行人の冷静さを失わず、毒を手に入れた。彼女はそれを飲んで自殺を遂げた。死ぬ間際でさえ彼女を見捨てて、社会民主主義連合の事務所に出かけアリバイを作つた。大袈裟な悲しみにひたつた彼自身も、数ヶ月後に死んだ。真相はいまださだかでないが、エリナーの死が強制されたものであることは明瞭である。だが、彼女のいわばフリー・セックスのような日常生活、エドワードの複雑な女性関係、マルクス主義の高潔な理想を演出する人びとの舞台裏には、それだけに濃厚な悲劇の匂いがたちこめているように思われる。

「ソヴェト・マルクス主義者たちの世代間の葛藤」にも、著者が行つた三回の講演旅行（デューイのプラグマティズムの発展、「科学の社会学」、「現代アメリカ思想」）や討論を通じて、公式的イデオロギー主義と自由な哲学との疎隔が浮彫りにされている。若い世代の哲学者たちのあいだには、科学的現実主義、実存主義、プラグマティズムの諸傾向が見受けられる。そして、「彼らの政治的統一というこの事実がおそらく、思想の史的唯物論的理論に対する反証の一項目である。表面上では、彼らの哲学的差異は政治における差異となんら対応していないのだから。しかしこのことは、実際に、ソヴェトにおける哲学の端緒であり、イデオロギーの終焉であるかも知れない」。最後に付け加えておくことは、フォイヤールがマルクスの家庭の不幸について問い、エリナーの自殺のひとつの原因が、ヘレーネと非

嫡出子にあつたことに触れた。彼がモスクワで社会史国際研究所を訪れた折に、その文献の有無を確認したところ、その証拠は疑う余地がないと知らされたとのことである。所長は興味深々、同僚のひとりは大声を張りあげた。「*non est in re "nihil humani a me alienum puto."*」というマルクスの言い草とびつたりだよ——私がこの研究所で聞いた唯一とつマルクスの冗談」。マルクスの用いた言語ンボルにまでフォイヤールが精神分析的解釈をくだしていることには、いささかうがち過ぎた節もあろう。しかしながら、幻想は幻滅に変わる。薄倅におわるというには余りにも無慙な死に至る病、結局は、死によつてしかその病を癒せぬ絶望の淵に歩み寄つていたマルクスの四女エリナーは、われわれの時代においては、スターリンの娘スヴェトラーナを想起させずにはおかない。

(奈良 和重)

Adelaide C. Hill & Martin Kilson, eds.,

Apropos of Africa:

Sentiments of American Negro Leaders on Africa

from the 1800s to the 1950s

London: Frank Cass & Co., Ltd., 1969, xiv + 390pp.

アデレード・C・ヒル
マーチン・キルソン 共編

『アフリカについて

——一八〇〇年代から一九五〇年代にいたる

アメリカ黒人指導者のアフリカ感——』

一

本書は、その表題からも分かるように、一八〇〇年代から一九五〇年代にいたる時期のアメリカ合衆国における黒人運動指導者の対アフリカ感情、対アフリカ認識を、かれらの演説、手記、論説などによつて直接語らせることを狙いとして編まれた、一種の資料集である。

もともと合衆国の黒人がアフリカから運ばれた奴隷の子孫である